

アカデミック・ライティングについての学習支援体制の構築 —関西大学ライティングラボの授業外個別相談と正課教育の連携—

多田泰紘^{*1}、岩崎千晶^{*1}、中澤務^{*1}

^{*1} 関西大学

関西大学ライティングラボは、学部生を対象に、レポートや卒業論文などのアカデミック・ライティングに関するさまざまな学習支援を行っている。そのひとつとして、正課教育と連携した授業課題に関する個別相談を実施している。2015、2016年度にライティングラボへ寄せられた個別相談の内容を分析した結果、1、3年生はレポート課題に関する相談が多く、正課教育との連携の効果が見られた。他方、2年生は連携した授業の課題に関する相談件数が比較的少なく、さらなる連携強化の必要性が示唆された。また、2年生は所属ゼミ選択や留学などの志望理由書の、4年生は卒業論文の質問・相談に訪れる割合が高かった。今後、研究室やゼミの指導教員、学生支援組織のスタッフとの連携体制を構築し、正課教育で扱わない文章に関するライティング学習支援の促進が重要と考えられる。

キーワード: ライティングセンター、授業外学習支援、正課教育、利用分析、高等教育

1. はじめに

アカデミック・ライティングは大学での学びの基盤であり、大学は教養教育および学習支援などを通じて、文章作成に関する知識・技術の指導、論理的思考法の教授を行っている⁽¹⁾。

関西大学ライティングラボ（以下ラボ）では、2012年度より同大学部学生を対象にレポート・卒業論文・レジュメといったアカデミック・ライティングに関する個別相談対応を全学的に展開している。学生は、授業外で課題等に取り組む時にライティング・チューター（大学院生博士後期課程・PD）からアドバイスを受けることができる。ラボでは、学生の自律的な学習を促進するにあたり正課教育と連携した個別相談を実施してきた。授業内で出された課題内容について担当教員とラボが情報共有を行い、学習目標に沿った支援を行ってきた。連携授業を履修している学生は教員からラボ利用を推奨あるいは指示されており、ライティングに関する学習支援を受ける機会が提供されている。

本研究では、正課教育との連携により来室した利用者（以下連携来室者）と自主的に来室した利用者（以下非連携来室者）の相談内容について分析を行い、授業外個別相談に対する学生のニーズと今後の課題について考察する。

2. 研究方法

ラボの2015年度および2016年度の開室期間、および延べ相談者数を表1に示す。

表1 2015、2016年度の個別相談対応状況

年度	開室期間	連携 来室者	延べ 相談者数
2015	4-7月	555人	1316人
2016	10-1月	622人	1272人

相談学生の来室日時や、文章作成の進捗状況、相談内容などの情報はTEC-book⁽²⁾に登録・蓄積される。本研究ではTEC-bookに蓄積された2015年度および2016年度の相談データを用いて、相談数の推移や文書種類別相談者数の分析・比較を行った。

3. 結果と考察

相談者の来室時期の推移を図1に、質問対象となった文書の種類ごとの相談者数を表1に示す。分析の結果、1年生からのレポート作成に関する相談が最も多く、春学期（4-7月）に相談が集中することが示された。また、年末（11-12月）に4年生の卒業論文に関する相談が増加し、10月に2年生の志望理由書の書き方についての質問が増加する傾向が見られた。志望理由書の相談数増加は、関西大学の一部の学部において3年生以降のゼミ所属希望先に志望理由書を提出する

ことが理由のひとつと考えられる。

各学年に特定の文章の相談が集中する傾向にあり、これに即した相談対応の体制を整えることに加え、特定の学年を対象としたライティングに関する講座や自習用教材の提供が必要と考えられる。

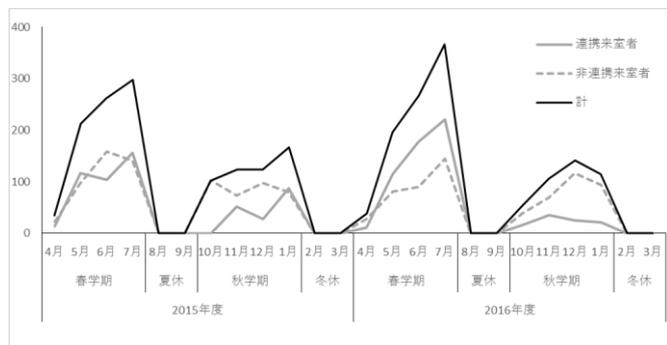


図1 延べ相談者数の推移（人）

表1 文書の種類別延べ相談者数（人）

学年	1	2	3	4	計
レポート	806	66	193	12	1077
	541	111	50	16	718
	1347	177	243	28	1795
卒業論文	0	0	3	6	9
	0	7	31	303	341
	0	7	34	309	350
志望理由書	0	0	0	0	0
	28	133	27	22	210
	28	133	27	22	210
レジュメ	14	3	0	1	18
	33	8	4	2	47
	47	11	4	3	65
スライド	3	0	2	0	5
	11	3	2	6	22
	14	3	4	6	27
その他	61	3	2	0	66
	28	15	33	16	92
	89	18	35	16	158
計	884	72	200	19	1175
	641	277	147	365	1430
	1525	349	347	384	2605

各項上段から連携来室者、非連携来室者、延べ相談者の人数

相談者の来室時期、相談者の学年、および持ち込まれた文書の種類について、連携来室者と非連携来室者を比較すると、春学期に1、3年生のレポート課題に関する連携来室者が多く、秋学期は4年生の卒業論文と2年生の志望理由書に関する非連携来室者が多かった。特に1年生は非連携来室者数も多く、アカデミック・ライティングに関する支援を提供できた。他方、正課教育と連携したサポートはレポート課題がメインとなるため、ゼミに配属され卒業研究に取り組む3年生秋学期～4年生は自発的な利用に留まることが示さ

れた。また、正課教育で扱わない志望理由書の書き方についての相談はすべて非連携利用者によるものであった。卒業論文や志望理由書など正課教育外のライティングについても、教職員と連携した支援体制を構築する必要がある。例えば、指導教員から卒業論文を書く際にラボ利用を促す、学生支援組織を通じて志望理由書等の個別相談に関する広報を行うなど、学生の利用促進を図る。

他方、分析結果より2年生の連携来室者数が少ないことが示された。3、4年生と比較すると、2年生は正課教育内でレポート課題に取り組む機会が多いと考えられる。アカデミック・ライティングは1回の講義で得られる知識だけではなく、繰り返し経験することにより身に付ける技術を含んでいる。ライティング学習に空白期間が生じることは大きな問題であり、ラボが取り組むべき課題と言える。今後、2年生を対象とした正課教育との連携拡大を図るとともに、授業外セミナーやeラーニング教材の提供など、個別相談と異なる支援体制を展開していく考えである。

謝辞

本取組の実施にあたりご協力いただきました、小林至道先生、西浦真喜子先生、毛利美穂先生、および2015、2016年度ライティングチューターの皆様に感謝いたします。

参考文献

- (1) 井下千以子：“思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築—Writing Across the Curriculum を目指して”、関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター（編集）『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』第1章、ミネルヴァ書房（2013）
- (2) 毛利美穂、小林至道、稲葉利江子、長畑俊郎、森田弘一、森村淳、西浦真喜子、本村康哲：“ライティングセンター運営支援システムの設計と運用”、日本教育工学会第31回全国大会、大阪大学（2015）

4. 付記

本取組の一部は、2016年度関西大学教育研究高度化促進費において課題「アカデミック・ライティング力を育むための教育システム開発とデザイン原則の導出」として促進費を受け、その成果を公表するものである。